

## 震災時、キャンピングカーはどのような活躍をしてくれたのか

### 熊本地震で実力を発揮したモバイルファーマシー 長期化する被災地での医薬品供給をサポート

東日本大震災の経験から、被災地での医薬品提供が困難であることがわかった宮城県薬剤師会が企画したのがモバイルファーマシーというクルマだった。製造はVANTECHが行っていて、車内に300~500品目の医薬品を搭載でき、冷蔵庫なども装備しているという。被災地では薬の調達が重要だという。「被災地では怪我人などの応急処置も増えますが、普段から薬を飲んでいる人たちの薬も確保しなければなりません。しかし、道路は寸断され、流通もストップすることから、機動力のある薬局のような存在が必要でした。そんな話を宮城県薬剤師会の方からいただき、VANTECHのキャンピングカー作りのノウハウを活かして、モバイルファーマシーというクルマを作りました。最初は宮城県の薬剤師会からの依頼でしたが、他県の薬剤師会からも依頼が入ってきて、クルマを準備している時に熊本地震が起きたのです」と露木さん。

露木さん自身も熊本地震が発生した時、すぐに被災地へ足を運び、救援物資などを届けたという。そして、モバイルファーマシーも集まってきて、避難している人へ薬を提供してくれた。実際の活動を通して学ぶことも多かったという。クルマはどのような場所に停めた方がいいのかなど、被災地でのキャンピングカー活用について、気づくことも多かった。この経験からも、防災でのキャンピングカー活用はさらに充実していくのだろう。



**VANTECH**  
広報部  
露木 伸也さん

### オーナーの集まりでスタートした炊き出し活動を通して 「キャンピングカーは究極の防災用品」と実感

新潟県中越地震をきっかけに、被災地での炊き出しボランティアをスタートしたNPO法人キャンパー。もともとはキャンピングトレーラーオーナーの集まりだったが、何か協力できることがないかと考え、ミーティングなどで行ってきた炊き出し活動で被災地をサポートすることになった。現在では「災害時炊き出しマニュアル」という本まで出していて、東日本大震災の時は、JRVAと協力してキャンピングカーの活用をサポートした団体だ。「2004年中越地震の時は、住む場所がないのでテントなどが必要とされていました。私たちは普段からキャンプ活動をしているので、テントなどもすぐに集めることができます。そこで、キャンピングカーで救援物資を運んだのですが、最初はレジャー用途のクルマで被災地に入ることに抵抗がありました。みなさん、日々の生活に苦労しているのに、遊びのクルマで現地についていいのかと考えてしまうのです。しかし、何回も被災地での炊き出し活動をしていると、キャンピングカーが究極の防災用品であると感じるようになりました」という。

普段はレジャー用途で水や食料を積んでいるので、クルマの中に生活必需品が常に備蓄されている状態。さらに、被災地で必要とされるトイレも設置できることから、飯田さんは「キャンピングカーはパーソナルな避難場所として、一家に一台あってもいいと思います」と防災用品として所有することを提案している。



**NPO法人キャンパー**  
代表理事  
飯田 芳幸さん

### 燃料が手に入らない時にキャンピングカーに搭載された ソーラーパネルが威力を発揮

東日本大震災でトイファクトリー千葉さんの実家が被災した。当時、岐阜の本社に勤めていた千葉さんは家族へ連絡し、すぐに救援へ向かうことを決めたという。会社からの指示もあり、発電機などの救援物資をハイエースのキャンピングカーに載せてすぐに出発。夜通しでクルマを走らせて、現地に入ったのは震災翌日のことだった。物資を降ろして、家族のもとへ。キャンピングカーは弟の居住スペースとして利用され、約1週間、クルマの中で生活することになった。そんな状況下で必要とされていたのが、電気だったという。

「実家では酪農をしていたので、搾乳機などを動かす電気が必要でした。さらに、家が倒壊してしまっても、情報を得るために、携帯電話の充電だけは必須でした。当時、ガソリンの入手も困難だったので、発電機は燃料が切れたら使い物になりません。そんな時、キャンピングカーのソーラーパネルが役に立ったのです。エンジンをかけることなく、静かに電気を供給し続けるシステムは、被災地だからこそ威力を発揮してくれました」

被災地では食料や水は確保しやすいという。しかし、プライベートスペース、情報ツールでもある携帯電話の充電電源が確保できるのはキャンピングカーならではの。そんなキャンピングカーを千葉さんは「普段は楽しい思い出を作るクルマですが、いざという時に家族を守るシェルターになってくれるクルマです」と伝えている。



**トイファクトリー東北**  
店長  
千葉 吉衛門さん





## 防災グッズとしてのキャンピングカー

「ジャパンキャンピングカーショー2022」では、日本RV協会のブースに防災をテーマにしたキャンピングカーの展示エリアが設けられた。キャンピングカーの災害時の活用方法について詳しく説明されていて、多くの来場者が足を止めていた。

「日本RV協会では、東日本大震災のときに会員企業9社から20台ほどのキャンピングカーを東北に持っていきました。そこではボランティアさんの活動拠点として、また災害対策本部を設置して打ち合わせスペースとしても活用されました」と日本RV協会の荒木賢治会長が当時の状況を説明してくれた。

当初、協会としてはキャンピングカーを被災者に貸し出したい気持ちもあったが、用意できる車両台数が足りなかった。そこで、被災者を支えるボランティアの方々への支援として、この20台のキャンピングカーを活用してもらうことになったのだ。

もちろん、現地にはキャンピングカーを所有している被災者もいたという。

「自宅がいつ崩れるかわからないためキャンピングカーに避難した方、ペットと一緒に避難した方、授乳が必要な小さなお子さんと一緒に避難した方などがいらっしゃいました。このような大きな震災など、有事の時であっても安心して過ごせるシェルターとして、キャンピングカーを活用されていました」と荒木会長。

キャンピングカーが安心して過ごせるシェルターとして適しているともいう。

「空間が広いことがポイントです。熊本地震では、自動車に避難した方がエコノミー症候群になったと報道されていましたが、彼らは足を伸ばせない姿勢で寝ていました。キャンピングカーはフルフラットの就寝スペースを装備していることが条件となっているので、どの車種を選んでも足を伸ばして寝ることができます。

また、キャンピングカーはエンジン用のメインバッテリーと、居住空間用のサブバッテリーの2種類を搭載しています。エンジンをかけたり走行したりすることでサブバッテリーを自立して充電できるため、電気が遮断された環境でも、バッテリーに溜まった電気を使用することができます。被災地で一番大切なのは「通信」。情報収集をしなくてはいけないのに、携帯電話の充電がないという事態は避けたいですね。電力を確保できる安心感は、避難時のストレスも軽減してくれるのです」

## 国や自治体取り組み始めた、災害時のキャンピングカー活用

近年、国や自治体が、キャンピングカー活用に積極的になっている。このようなキャンピングカーを取り巻く状況の変化を荒木会長はどのように捉えているのか。

「東日本大震災や熊本地震などで、キャンピングカーの活躍を目の当たりにしたことが大きかったのではないのでしょうか。キャンピングカーの特徴である空間の広さ、就寝スペースが確保できる点を活かし、遠方から数日かけて大量の物資を運んだ事例もあります。加えて、災害が起きたときに国や自治体の職員は現地に招集されますよね。たとえば大雨が降ったときに、役場に集められるが仮眠する場所はない、でも緊急事態が解除されるまで役場に滞在しなくてはいけない。そんな状況を改善するためにも、国や自治体がキャンピングカーを持つメリットを感じているのでは」

災害時のキャンピングカー利用は世界的に見ても一般的だともいう。

「アメリカでは自治体や政府がキャンピングカーを所有しています。それを平時はキャンプ場などに低価格で貸し出して、有事のときには被災地で活用できる仕組みがすでに作られているからです。国内でも、九州北部豪雨の被災地である朝倉市はキャンピングカーを所有して有効に活用していました。地震などの有事の時は対策本部や休憩所として、平時は観光協会がレンタカーとして町の活性化に利用しているのです。こうした事例を国内にも増やしたい、と考えています」

今後、キャンピングカーが人々の暮らしにどのような影響を及ぼすのか？ 荒木会長にはその将来のビジョンが頭の中にしっかりと描かれている。

「キャンピングカーが一番活用されている観光産業では、今後ますますキャンピングカーの需要が高まると予想しています。感染症対策として公共交通機関を使わずに旅ができること、電車やバスが通っていないエリアにも足を延ばせることが「くるま旅」の強みです。更に宿泊施設のない場所であっても車中泊することができるので、旅行者の行動範囲が広がり自由度が増します。クルマで旅するのが当たり前の時代がやってくるはずですよ」

さらに荒木会長は、このようなキャンピングカーの有用性をたくさんの方に知ってもらい、国や自治体、そして個人オーナーにとっても、キャンピングカーを防災グッズとしてもっと活用してほしい、と語っていた。



一般社団法人日本RV協会会長 荒木 賢治



DO FOR JAPAN

～キャンピングカーができること～

### 東日本大震災時の活動



当時の日本RV協会の増田浩一副会長(復興支援プロジェクトリーダー)より、宮城県・石巻市に記念のキーが贈呈された



被災地の介護施設の敷地内に置かれて、被災者たちの「憩いの空間」として活用されている日本RV協会のキャンピングカー



貸与式会場の石巻市「おしか家族旅行村」に勢揃いした15台のキャンピングカー





## キャンピングカーを活用する 災害協定が各地で締結

近年、日本RV協会の会員企業と行政での災害協定が盛んに結ばれている。各地域で被災した時に、キャンピングカービルダーや販売店が保有するキャンピングカーが貸し出される、という協定内容になる。キャンピングカーの活用方法は、スタッフの宿泊先であったり、プライバシーを確保しなければならない避難者向けの施設など、さまざまな用途が想定されている。行政側もキャンピングカーの被災地での有効性を感じているようで、今後もこのような災害協定が各地で締結されることが見込まれる。



ナッツ



## 地域と繋がり、広がる日本RV協会会員の災害協定の取り組み

会社名	公共団体名	協定概要	その他の協定先
株式会社ナッツ	九州経済産業局	九州経済産業局及び九州産業保安監督部から要請を受けた場合、可能な範囲で車両の提供に努める。	他2自治体
株式会社ダイレクトカーズ	三重県鈴鹿市	地震などの大規模災害発生時に、市の要請で同社が有償で車両を貸し、避難所などで活用する。	他4自治体
株式会社トイファクトリー	岐阜県美濃加茂市	大規模な災害が起きた際に、キャンピングカーを避難所などとして活用するための協定。	他1自治体
株式会社レクビィ	愛知県瀬戸市	瀬戸市が災害に遭った際に所有するキャンピングカーを無償貸与すること、展示場の展示車両を避難所として提供する。	
株式会社岡モータース	愛知県四国経済産業局 及び 中国四国産業保安監督部四国支部	職員による現地での災害対応活動を円滑かつ効率的に行うため、キャンピングカーを現地宿泊施設として活用。平時の防災訓練や研修での活用。	
株式会社 アールブイランド	茨城県常総市	災害発生時にキャンピングカーの貸し出しをする災害協定を締結。	
株式会社クルーズカンパニー	神奈川県茅ヶ崎市	災害発生時にキャンピングカーの貸し出しをする災害協定を締結。避難所の市民の皆様へ給電支援をサポート。	
キャンピングカー株式会社(賛助会員)	岡山県岡山市	岡山市において台風や地震などによる災害が発生した際に、CCKKが所有するキャンピングカーを優先的に貸し出すことにより、岡山市の災害応急対策の円滑な遂行することを目的とする。	他2自治体



岡モータース



ダイレクトカーズ



レクビィ



クルーズカンパニー(オートワン)



アールブイランド



トイファクトリー